

ボールの行方

小川未明

青空文庫

「しょう、正ちゃんは、いまに野球やきゆうのピッチャーになるといっています。それで、ボールをなげて遊ぶあそのが大だいすきですが、よくボールをなくしました。」

「お母かあさん、ボールをなくしたから、買かっておくれよ。」と、学が校っこうへいこうとしてランドセルをかたにかけながら、いいました。「また、なくしたのですか。二、三日にちまえ前に買かったばかりじゃありませんか。」

「僕ぼく、ボールがないときびしいんだもの。」
「いいえ、そう毎日まいにち、ボールばかり買かってあげられません。」
と、お母かあさんはおっしやいました。

「ねえ、お母さんかあ、もうなくなさないから。こんどから、きつとなくなさないから。」

「なくなさないと、なんどいいましたか。ものを粗末そまつにするからですよ。」

「粗末そまつになんかしないよ。だって、どつかへいってしまうんだもの。」

「おとなりの誠さんまことなんか、おちついていらつしやるから、おまえみために、そうものをおなくしになりませんよ。」と、お母さんかあは、となりの誠くんまことのことをほめられました。

「誠くんまことだつて、なくすやい。昨日きのう、上ぐつうわを片つぽおとしてきて、お母さんかあにしかられていたから。」と、正ちゃんしょうはいいまし

た。

「じゃ、今日は買ってあげますから、名まえを書いておきなさい。」
 「とって、お母さんはボールを買うお金をくださいました。
 「ありがとう！」と、正ちゃんはいただいて、元気よく出かけました。

「やさしいお母さんだなあ。」と、正ちゃんは心の中で思ったのです。

正ちゃんは新しいボールを買って、それに「二年一組 山本
 正治」と書きました。正ちゃんの帽子にもハンカチにも、けし
 ゴムにも、みんなそう書いてありました。だから、学校の中で

おとせば、拾った人が先生にとどけてくれますので、また自分のところへもどつてきました。たとえば学校の外でも、正直な人なら、

「ああ、あの学校の生徒さんがおとしたのだな。」といつて、学校へとどけてくれました。

正ちゃんはお家へかえつて、「ただいま」をすると、お母さんのところへいつて今日買ったボールをお見せしました。

「いいんですね。名まえを書きましたか。今年から二年生ですよ。」と、お母さんが注意をなさいますと、正ちゃんは、

「ほら、二年一組と書いてあるだろう。」と、いつて、お母さんにボールをもう一ど見せました。

「正ちゃんしょうちゃんはぼんやりしているから、また一年ねんと書きかやしないかと思おもったのよ。」

そのとき、お姉ねえさんが、

「ね、正ちゃんしょうちゃん、ピッチャーは、どんなかつこうをしてボールを投なげるの。」と、いいました。

「笑わらうから、やだあい。」

「笑わらわないから、ようおしえてよ。」と、お姉ねえさんはいいました。お母かあさんも笑わらいだしそんな顔かおつきをむりにこらえて見みていらつしやいますと、正ちゃんしょうちゃんはボールを持もった右手みぎてをぐるぐるつと頭あたまの上うへでまわして、片手かたてをあけて投なげるまねをしました。

「まあ、すてきね。」

「僕の球は、それはカーブがあるんだから。」

「あまりありすぎて、球をなくすんでしょ。」と、お母さんがお
つしやったので、お姉さんは、声をたてて笑いしました。

原っぱへ行ってすればいいのに、正ちゃんはせまい往来で、
小さい花子さんを相手にキャッチボールをやっていると、正ちゃん
の投げたボールが、からたちの垣根をこして、向こうの庭には
いってしまいました。

「困ったわね、正ちゃん。」と、花子さんがいいました。

「どこへはいつたんだろうな。」と、正ちゃんは、からたちの垣
根のあいだから、庭の中を見ていました。

すると、ちようど日のよくあたるあちらのえんがわで、おばさんが赤ちゃんのおしめをかえてやっているところでした。

お庭の木には、かきが赤くうれておりました。赤ちゃんは、なにがおかしいのか、けたけた声を出して笑っていました。

正ちゃんはボールのことなど忘れてしまつて、かわいい赤ちゃんの方を見とれていました。

「赤ちゃん、かわいいな。」と、花子さんの方を向いていいました。

「どれ、私にも見せて。」といつて、花子さんも垣根のあいだからのぞいて見ました。

「僕んちにも、あんな赤ちゃんあるといいのだがな。」と、正ちゃん

やんはまたのぞいて見ますと、赤ちゃんあかは、おしめをかえてしまつて、おばさんにだっこして、笑わらっていました。

正ちゃんしょうはボールのことをやつと思おもいだして、

「花子はなこさん、拾ひろつておいでよ。」と、いいました。

私わたし、いやよ。正ちゃんしょうがいいわ。」

「花子はなこさん、早はやくいつておいでよ。」

「おばさん、まりがはいったの。」と、花子はなこさんがいいました。

すると、男おとこの声こゑで、

「いま、拾ひろつてあげますよ。」といつて、おじさんが拾ひろつて、こ

ちらへ投なげてくださいました。

あちらから、太郎さんたろうと誠さんまことがやってきました。

「原つばへいつて、キャッチボールをしない？」と、いいました。

「ああ、しよう。」

「正ちゃんはいきかけて、花子さんはなこに、

「花子さんもおいでよ。」と、いいました。

「私わたし、お家うちへかえるわ。」

「また、あした遊あそぼうね。」

三人にんは、原つばはらへきました。太郎さんたろうのたまは、いちばん強つよいのです。つぎが、正ちゃんしょうのたまです。誠さんまことのは弱よわくてそれたりするので、

「もつといたたまをお出だしよ。」と、太郎さんたろうがいいました。

このとき、向こうで三人のまり投げを見ていた少年が、
「僕もなかまに入れてくれない？」と、いいました。

少年は、太郎さんと誠さんに、

「いいだろう？」と、ききました。

「ああ、いいよ。」

そこで、四人はわかるがわるキヤッチボールをしました。少年のたまはなかなか強いので、正ちゃんや誠さんは、たびたび受けそこないました。

「君のたまは、すごいんだね。」と、正ちゃんが感心すると、少年はもつともつと強いたまを出そうとしました。

そのうちに悪いたまを出したので、ボールはとおくへころがっ

ていって、みんながそのあとを追いかけてさがしたけれど、わか
らなくなりました。

「あんな悪いたまを出すんだもの。」と、太郎さんがいいました。
少年は顔を赤くして、

「僕、弁償してあげるよ。」と、いいました。

「君、あやまつたらいいだろう。」と、誠さんがいいました。

「僕、なくしてすまないと思うよ。だけど、お金を持っているか
ら、買ってかえすよ。」と、少年はいいました。

「正ちゃんは、またボールをなくしてしかられると思っただけれど、
みんなで遊んだのも、そんなことしなくてもいいよ。お母

さんを買かつてもらうから。」と、いいました。

「僕ぼく、たのんで入いれてもらったのだから。」と、いいしますので、太郎たろうさんが、

「じゃ、正しょうちゃん、それでいいじゃないか。」と、いいました。

四人にんは学がっこう校まへの前まへへいって、お店みせでボボールールを買かいました。正しょうちゃんちんが、

「また、ボボールールをややらない？」というまことと、誠まことさんも太たろう郎郎さんも賛さ成せいしましたが、少しょう年ねんはつかお使つかいにきたたのでもうかえらなければならないといいました。

「ささようなら！」

「また、おおいでよ。」

少年しょうねんは三人にんとわかれて、さつさといつてしまいました。正しょうちゃんちゃんは、少年しょうねんの買かつてくれた新あたしいボみールールを見て、なんだかいき気持きもちはしなかつたのです。

「気きのどくなことをしたな。どうしても買かつてもらわなければよかつたのに。」と、心こころのうおちで思おもいました。

正しょうちゃんちゃんは家うちにかおえると、お母かあさんさんにそのボみールールを見みせて今日きょうのはなし話をしました。

「どこの坊ぼっちゃんちゃんですか？」と、お母かあさんさんはおおききになりなりました。
「僕ぼく、知しらない。」と、正しょうちゃんちゃんが答こたえると、

「これから、そんなときは、いいと、ことわるものですよ。」と、お母かあさんさんはおおつつししややいいました。

あくる日、正ちゃんは花子さんと原っぱで遊んでいました。

「正ちゃん、ここへきてごらんさい。ありがなにかはこんでてよ。」と、花子さんがよびました。

正ちゃんが走っていくと、かわいらしい小ぢやなありのむれが、なにかくわえて、列をつくって走っているのです。

「花子さん、もう冬のおしたくで、いっしょうけんめいなんだよ。」

だんだんとつながり進んでいくありのむれを、二人は足ずりして追っていくうちに、正ちゃんは昨日なくしたボールが、枯れ草の中にかくれているのを見つけました。

「ボールがあつた！」

「正ちゃんしょうちゃんはよろこびの声をこえ、あげました。そして、なつかしい自分のボールじぶんをにぎって、しばらくぼんやりとしていました。

「どうしたの、正ちゃんしょうちゃん？ なくしたボールが見みつかつたの？」

「僕ぼく、なくなつたと思おもっていたら、あつたのだよ。あの子こに弁償べんしやうしてもらつて、どうしようかなあ。」と、正ちゃんしょうちゃんはポケット

トからもう一つのボールを出だして考かんがえていました。

「誠まことさん？ 太郎たろうさん？」

「知らない、あつちの子こだよ。」

「きのう？ 太郎たろうさんくらいの子こでしよ？」

「そうだよ。」

「牛込うしごめの兄にいさんだわ。正しょうちゃんたちがボールをしていると私わたしが
いったら、兄にいさんはとんでいったわ。」と、花はなこ子こさんがいいまし
た。

「じゃ、このボール、兄にいさんにかえしておくれ。」

「ごんどきたら、かえしてあげるわ。」

正しょうちゃんはなこは花はなこ子こさんに、少しょう年ねんの買かつてくれたボールをわた
すと、気きもちがらくらくとしました。

そして、自分じぶんのボールを力ちからいっぱい空そらに向むかって高たかく投なげあげ
たり、受うけたりして、遊あそんだのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷

1983（昭和58）年1月19日第6刷

※表題は底本では、「ボールの行方《ゆくえ》」となっています。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2015年5月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

ボールの行方

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>